

慶應義塾大学

文学部 (2月15日実施)

英語

(I)

D meteorologist

(II)

登山を続けたら筆者もそこで命を落とす危険があった。(25)

(III)

I perspective

(IV)

古代人は学や知識がなく野蛮だという固定観念も、根拠に乏しく誤っているということ。(40)

(V)

今日と比較して、古代には天才が少なかったことを裏付ける証拠はなく、むしろもっと多かったという証言する学者たちもいた。

(VI)

理由として言及できることが少ないこともあり、今日に至るまで古代の個人についてはほとんど文献が存在しない。

(VII)

新発見の数が爆発的に増えたことで、考古学に関する書籍の筆者たちは例外なく、本の執筆から出版までに必然的に起こりうる新事実発見に対して必ず事前に読者に容赦を願う記述を含む程になった。

(VIII)

多くの古代人に関する典型的な見方では、個々の特異性や個人という着眼点が欠けていた。前史の時代で名前や記録がなくとも、古代における個人という存在は注目に値すると筆者は考えており、この診断記録に古代人の「個」や「特異性」を垣間見て感動したから。(120)

(IX)

Living in an era of globalization, we tend to equate English fluency mistakenly with the breadth of international perspective.